

〔学術論文〕

子どもの登園における保育者の配慮に関する研究

A study of the teachers' consideration
for children attending kindergarten and day care

山本 聡子・松葉 百香

Satoko Yamamoto, Yuka Matsuba

要旨：本研究の目的は、子どもの登園における保育者の配慮を明らかにすることである。そのため、オートエスノグラフィーの手法を用いて元保育者の保育実践を言語化し、SCATの手法で分析を行った。その結果、登園時の配慮を構成する要素として、①保育者は「場の変化による不安定な時間」「集中に適した時間」という朝の捉え方をしていること、②子ども理解に基づく環境構成が重視され、それらは常に担任が子どもの様子を把握しやすい園のシステムによって裏打ちされていること、③登園時の不安定さを緩和するために、継続した遊びへの期待を持てるような配慮を行うことの3点が浮かび上がった。

キーワード：登園 保育者の配慮 環境構成 SCAT

1. はじめに

(1) 「登園における配慮」に着目する意義

子どもにとって保育所や幼稚園（以下、「園」と記す）は、家庭と同じく重要な生活の場である。しかし、家と園は生活の流れやルール、コミュニケーションの方法など様々な点で異なった性質を持つ社会であり（藤崎、1991）、子どもたちは毎日登園のたびに小さな「移行体験」をしていると捉えられる。そのため保育者には、一日の園生活がスムーズに始められるような配慮が求められる。幼稚園教育要領（文部科学省、2008）に「幼児の行う具体的な活動は、生活の流れの中で様々に変化するものであることに留意し、幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること」「特に週、日などの短期の指導計画については、幼児の生活のリズムに配慮し、幼児の意識や興味の連続性のある活動が相互に関連して幼稚園生活の自然な流れの中に組み込まれるようにすること」とあるように、子どもの生活のリズムや流れが、子どもの興味や関心に沿った形で園の生活の流れに調和していくようするための特別な配慮が必要なのである。

また、朝の自由活動は、身支度を済ませてから、全員の子どもが登園しクラスのメンバーがそ

ろまで行っているという園がほとんどである（日本保育学会、1979）。子どもの主体性が尊重される自由活動の時間ではあるが、上記のような家から園への移行に伴う不安定さを持つ時間であることも踏まえて、保育者がどのようなねらいや意図をもって子どもへの配慮や環境構成を行っているかは、そのあとに続く園での一日の充実度に大きくかかわってくると考えられる。

(2) 従来の研究

登園における保育者の配慮に関連する従来の研究は、「登園後の子どもの行動に関するもの」と「不登園傾向の子どもに関するもの」の二つに大別される。

山田・服部（2005）は、主体的な遊びを重視している園の中でも登園時の環境の設え方の異なる3つの園で観察を行い、子どもが登園後に主体的に遊びを見つけ活動に入るまでには、ごっこ遊びやブロック遊びなどそれぞれの活動内で共通した行動様式が見られる一方、その園の環境構成によって、身支度後の遊びへの移行や、遊びへの集中の度合いが異なることを明らかにした。

登園がスムーズにいかないケースについて、加藤（2000）は、教育センター相談員として保育者以外の立場で不登園を主訴とする子どもに関わり、動作法を通して子どもの行動が改善するとともに母親の子どもの見方が変化していった実践例を報告している。また、平本（2000）は就園前の子どもの保護者と在園児の子どもの保護者に対して「不登園の原因の所在」「対策の責任」「不登園の容認の是非」「わが子が不登園になったらどうするか」についてアンケート調査を行い、実際に不登園に直面した保護者はそうでない保護者よりも原因や責任を園や子どもに求める傾向があることを明らかにしている。

これらの研究では、登園後の子どもたちの行動の実態については観察・分析がなされているが、登園を迎えるまでの保育者のねらいや意図がどのようなものであったかというところは明らかになっていない。また、園ごとの環境構成の違いによる子どもたちの登園後の行動の異同についての言及はあるが、保育者の考え方やねらい、子どもへの配慮にも関わってくると考えられる園方針や登園方法など外的な要因についても明らかになっていない。

(3) 本研究の目的

以上のことから、子どものスムーズな登園と園生活への移行を可能にするために、園の方針やシステムなどの枠組みの中で、保育者がどのような意図をもって、どのような配慮配慮を行っているかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) データ収集の方法

本研究では、園の保育方針とシステム、およびその中で保育を遂行している保育者がどのよう

に登園時の保育をとらえて、どのような配慮を行っているかの様相をとらえるため、データ収集の方法としてオートエスノグラフィーによるグループ・インタビューを行った。

オートエスノグラフィーとは、研究者自身の経験を振り返り研究の対象とする質的研究法であり、保育経験のある研究者によっても数々の取り組みがなされている（児玉、2011・岡田、2005・佐藤、2011）。保育研究においてこのオートエスノグラフィーを用いる意義として、佐藤は「短い期間での振り返りでは明らかになりにくい、自己の保育に存在する保育者特有のものの捉え方や考え方の様相を描き出すことを可能にする」と述べている。

また今回は筆者のみの経験を研究の対象とするのではなく、3人の保育経験者によるグループ・インタビューの手法を援用してデータを収集した。グループ・インタビューとは、「ある属性を共有する少人数（6～12人程度）の初対面の人々が、あらかじめ決められた調査計画のもとに選択され、依頼されて一堂に会し、2時間程度、くつろいだ雰囲気の対面的状況で、熟練の司会者の集団討議技術により、自由で自発的な発言を行い、調査者がそれらを言語データとして記録・分析する社会調査技法のこと」であり、名称としてはこのほかに「フォーカス・グループ」「グループ・ディスカッション」とも呼ばれる（保坂他、2000）。保坂はグループ・インタビューを用いる意義として『『複数の主観』によって議論がなされることによって、ひとりだけの観察者が陥りやすい独善性を排除できる』『主観の集合としての『間主観性』が保証され、データの妥当性・信頼性・客観性が企画設計・収集・分析の各ステップで保障されることにつながる』と述べている。本研究では人数や初対面でないという点でグループ・インタビューの手法そのままではないが、オートエスノグラフィーの手法では客観性に疑問が残しやすいという指摘（牛田、2004）に留意するとともに、多様な視点を取り込んだ上で過去の実践を振り返り自己の保育を語りなおすために、グループ・インタビューを行った。

調査対象者それぞれの概要は表1のとおりである。

表1 調査対象者の概要

	性別	勤務経験	保育経験年数
A	女性	私立幼稚園	6年
B	女性	私立幼稚園及び私立保育園	15年
C	女性	私立幼稚園	14年

上記の3名に、事前に「登園時に特に配慮していたこと」を巡ってのエピソードを2つずつ書いてもらい、それを読み合っただけの時の状況や子どもの様子、自身の気持ちと、今振り返ってどう感じるかについて、2012年7月31日に約45分間のグループ・インタビューを行った。ICレコーダーを用いてすべて録音し、文字に書き起こした言語データ（総数439セグメント）のうち、調査対象者らによる登園時の配慮に関しての発言19セグメントを抜き出し分析対象とした。

(2) 分析の方法

本研究では、データの分析・理論生成の方法としてSCATを採用した。SCAT (Steps for Cording and Theorization) は、大谷 (2007、2011) が開発した質的研究の言語データ分析のための手法である。その手順は、「マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言い換えるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ、構成概念の順にコードを考へて付していく4ステップのコーディングと、〈4〉のテーマ、構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続き」からなっている。この分析手法は、比較的小規模の質的データの分析にも有効であるという特徴を持つ。本研究で対象とするデータは、時間にして約45分のグループ・インタビューを文字化したものであり、比較的小規模なデータであるため、SCATが適していると判断した。

3. 結果と考察

(1) エピソード、会話データおよび分析結果

事前に書いて持ち寄り、グループ・インタビューの題材とした「登園時に特に配慮していたこと」のエピソードは以下のようなものであった。それぞれ2エピソードずつ計6エピソードあったが、当日グループ・インタビューで主に取り上げたものを以下に示す。

エピソード：年長クラス 2月生まれの男児O

おっとりとしていて、自分から目標に向かってどんどん取り組んでいくタイプではなく、友だちとののんびりした時間の過ごし方を好む。母親自身は、仲のいい母親同士の仲間の子どもと遊ばせたいようだが、その子らは勝敗や人より早いことなどに価値を置く利発なタイプの子どもが多いため、母親同士が遊ぶ約束をした時など、少し浮いてしまったり遊びについていけなかったりして、母としては「どうして他の子とこんなに差があるのだろう」と悩んでいた。本人は、その友だちも好きだが、園ではもっと遊びの好みの似た男児と、ブロックや、ぬいぐるみをしゃべらせ合ったりするようなゆったりした遊びを楽しんでいた。

11月になると、年少・年中での経験から「もうすぐ作品展だね！」と子どもたちのほうが意識し始め、クラス全体が作ることにに対して意識的になる。昨年までのところで、「年長になったらこれを作って飾りたい！」などと憧れているものがそれぞれにあり、担任に助言を仰いだりしつつ、コツコツ作る子が多くなる中で、Oはあまり身が入らない様子。

その頃、朝の遊びは折り紙、お絵かき、紙粘土、空き箱の制作、縫い物（マスコットや袋物）、毛糸の手芸（マフラーや帽子を編む、ボンボンのマスコットづくり）、木工（板に迷路を書き、くぎを打ってビー玉迷路づくり）、木片工作（ボンドで貼る）などを用意していた

が、子どものリクエストによって他の遊びをすることも可能であり、それは子どもにも分かっている。登園してロッカーに荷物を置いたら、自分で好きな遊びを選んで45分ほど取り組むことになっていた。

〇と一番仲のいいTは作ることが好きで、絵を描いたりくぎを打ったりすることに取り組んでいた。〇も同じことに取り組むのだが、作りたいイメージが自分の中にあるわけではないので、結局はおしゃべりで時間が過ぎたり、少し難しいとそこで躓いてしまったりする。

その頃、Tや同じようにおっとりとしたSと家で遊んだときに、「チョコ」というキャラクターを子どもたちの中で思い付き、その架空のキャラクターで盛り上がったとのこと。それを翌日Sが木片に目鼻を描いて作り、〇もまねて作る。もともと人形やぬいぐるみで遊ぶことは好きな仲間なので、担任のほうから、「チョコのおうち」「チョコのまち」というイメージを提案したところ、幾つもチョコを作り、色を塗ったり、木片を組み合わせた塔や家にチョコを置いて、「ここは〇〇の部屋」と見立てて遊んだりし始めた。

その後しばらくチョコの見立て遊びを工作にもつなげて、継続して取り組むことができた。チョコが可愛いと女兒を中心にクラスのほかの子どもたちにも評判になり、真似して作る子もいて、それも嬉しかったようだ。

〇は、入室してすぐ他のこと（友達とのおしゃべりなど）に気を取られ、身支度と遊び始めがスムーズにいかないことが多かったので、チョコ作りのテーブルは入ってすぐ目につくところに固定し、毎日そこでチョコ作りができる、とイメージできるようにしたのも良かった。

その時の思い：

優しい心の子どもで、それがクラスの中でも認められているが、人任せの面があり自分で考えない、自ら行動に移さないところもあったので、担任としてはその部分が変わっていくといいなと考えていた。

母親は〇に対して、かなり本来の性質とは違う方面を期待しており、周りの子どもとも比べてしまう気持ちもあって苦しんでいるようだった。〇もその期待をうすうす感じており、自分とのギャップに困っていた。作品展という結果がはっきりと目に見える行事で、他の子との差を見たくないという思いから、母親は家でかなり〇に発破をかけているようで、それも〇のプレッシャーとなっていた。

〇は慎重で、どうなるか道筋の見えないことには手を出さない様子も感じていたので、〇一人で何かに取り組むよう勧めるよりも、友だちと一緒にやってみよう、と誘う方針で援助をした。はじめは「友達と一緒にだからやる」のでも、やっていく中で遊びそのものに興味を持ってくれば、と願っていた。

今振り返ってみて：

友だちと一緒に、先の見通しが本人にもある程度つくもので、という方向性はよかったと思う。また入室後気が散りがちなのも、コーナーの固定で改善できた。木片に目鼻を描き、色を塗るという簡単な作り方ながら、町や家に発展でき、本人の好みの遊び方もできる「チョコ」という遊びはOにとっても合っていたと思う。

このように朝のスタートを、仲のいい友達と交流しながら切ることができ、本人がなんとなく抱きがちな劣等感をあまり感じなくすることにもつながったように思う。

これをもとにしたグループ・インタビューの会話データの中で、本研究のテーマである登園時の配慮について言及されている19セグメントを対象として、SCATの4ステップでのコーディングを行ったものが表2である。

表2 登園時の保育者の配慮に関するグループ・インタビューデータの分析表

発話内容	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念
1 作る遊びにスッと入れるように、作りやすいものが出てきたところをとらえて、入室してすぐ眼に着くように配置して、	作る遊びにすぐ入れるように/入室してすぐ目に付くところに配置	取り組みへのきっかけづくり/視認性	視覚誘因による環境構成	視覚誘因による環境構成
2 私はコーナーの場所をいろいろ新鮮味がある方を重視してたので、毎日場所をちょっとずつ変えたりとかしてたんですけど、この子の場合是一直も同じところにして、遊びが継続的につながるようにしたっていう。	新鮮味がある方を重視/場所をちょっとずつ変えたり/遊びが継続的につながるように	遊びの継続性重視	遊びの観点/継続性のある目的意識	室内遊びの環境構成/継続的な目的意識
3 やっぱり、登園時って園ごとの差がすごく出ますよね、本当に。	登園時って園ごとの差	登園時に顕著な園差	システムに起因する違い	システムに起因する違い
4 朝が一番、頭が、脳がクリアだっていう。	朝が一番、頭が、脳がクリア	朝は脳がクリア	朝の捉え方/集中に適している	朝の捉え方/集中に適した時間
5 8時45分から9時までの間に、お母さんがみんな連れてくる。だいたいそろろう。	お母さんがみんな連れてくる/大体そろろう	母子登園/短時間に全員そろろう	システムによる園児の揃いやすさ	システムによる時間的条件/園児の集まりやすさ
6 うちの園は本当にそのクラスごとの単位で動くので、自由に外に行き来していい時間がない。外に行く時もみんなで行く。	クラスごとの単位で動く/自由に外に行き来していい時間がない	クラス単位での活動	担任の視野の中での活動	園方針/担任による子ども理解
7 前の日に、今日はこの子がこれをやったから明日はこれをやるだろうなというのをだいたい全員分。	明日はこれをやるだろうな/全員分	翌日の見通し/保育者の予測	見通しに基づいた環境構成	室内遊びによるスムーズな一日のスタート/子ども理解に基づく環境構成
8 朝は、制作だけ。ままごととかブロックとか、あるに	朝は制作だけ/ままごとやブロック	朝は室内遊びのみ	場所限定/内容限定/担任の視野内	園方針/担任による子ども理解

	発話内容	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するよ うなテキスト外 の概念	<4> テーマ・構成概念
	はある。	もある		での活動に限定する園方針	
9	だから逆に言えば、いきなりこちらとしてもねらいのある活動なので、来てすぐのまったりした状態をどこまで許せるか、認めていくか。	いきなりこちらとしてもねらいのある活動/まったりした状態をどこまで許せるか、認めていくか	移行時間の短さ/目的意識のない子どもへの対応の難しさ	不安定な状態を安定化/目的意識を要求	目的意識による切り替え
10	こちらとしてはたぶん、活動にすぐ入れる子はぱっとは入れられるので、そういう子どもを基準に見てしまうから、来てすぐまったりした子は目立つ子、となってしまう。	活動にすぐ入れる子はぱっと入れる子はぱったりしたい子は目立つ子、となってしまう	保育者の求める姿/すぐに目的意識のある遊び	移行時間の短さ/目的意識を要求	目的意識による切り替え
11	離れた上で、どう園の一日のスタートを遊びこむか、みたいな・・・	離れたうえで、一日のスタートをどう遊びこむか	母子分離/園生活のスタートの切り方/目的意識のある遊び	園の一日に与える登園時の重要性	遊びこむ状態への移行
12	慣れてるから、毎朝、「僕は今日、リュック置いたらこれ作るんだ」とか、思いながら来る子がほとんどなんですけど、	毎朝/これ作るんだとか、思いながらくる子がほとんど	やりたいことを持ってくるの登園	目的意識のある登園/継続した目的意識	継続的な目的意識
13	そこに入り込めない、夢が朝、前日から何ももてない子の足取りが重いから、母子分離と言うより、ずっと幼稚園に来さずためには、朝、どんな充実した、手ごたえのある、継続した時間にするか、と言うのがイコールなんです。私にとっては。	夢が朝、前日から何ももてない子の足取りが重い/ずっと幼稚園に来さずためには/手ごたえのある、継続した時間にするかというのがイコール	スムーズな登園のための保育者の配慮/目的意識、手ごたえのある遊び/継続した遊び	遊びへの期待感による登園への意欲	遊びへの期待感による登園への意欲
14	帰り際に、一人ずつ握手してするとき、明日、今日のこの続きやろうね。	帰り際に/今日のこの続きやろうね	スムーズな登園のための保育者の配慮/目的意識の明確化	目的意識の明確化	継続的な目的意識
15	うちは、なるべく、朝来て遊び始めるまでを簡単にしようって言って、園服もとっちゃうでなくしたし、お便りも最初朝やってたのを帰りにして、それももういいやってなくして。朝来たら、リュック置いて、スモック着れば遊べるって言う。行程を減らして。	朝来て遊び始めるまでを簡単に/行程を減らして	遊びこむための配慮/ルーチン行程の簡素化	登園時の配慮/遊びへのスムーズな移行/ルーチン行程の簡素化	登園時の配慮/遊びこむ状態への移行/ルーチン行程の簡素化
16	(スムーズに部屋に入る、と言うところでは一緒に迎えるか、という発言を受けて)一緒にですね。	(スムーズに部屋に入るところでは)一緒に	スムーズな受け入れの大切さ/登園の重要性	充実した園生活の要件/スムーズな登園	充実した園生活の要件/スムーズな登園
17	朝一の主活動は、もうみんなが集まってすぐにしているイメージはあるんで	来てすぐってそれはそれで落ち着かない	主活動の捉え方/集合後すぐに行う/朝の捉え方/落	場の変化による不安定な時間帯	朝の捉え方/場の変化による不安定な時間帯

	発話内容	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念
	すけど、来てすぐってそれはそれで落ち着かないんじゃない？て言うのがあって、だからすごく。		ち着かない		
18	だから本当に、部屋に何か興味の持てるものを用意しておく、ではなくて、興味のあるものは目線のところに置かないようにしていたんですよ。	興味のあるものは目線のところに置かない	環境構成の配慮/室内に目を向けさせない/外遊びへの誘導	室内遊びへの興味/関心の抑制	環境構成の配慮/外遊びへの誘導
19	私は、早く出したい気持ち強いから、シールもすぐ貼れるように、切ったり、箱も二個用意したり。	早く出したい気持ち強い/すぐ貼れるように	室内より外/室内の行動を短く	外遊びへの誘導	ルーチン行程の簡素化/外遊びへの誘導

ここから、表3のようにストーリーライン、理論記述を作成した。下線部は分析の結果現れた概念名である。

表3 ストーリーライン、理論記述

ストーリーライン (現時点で言えること)	登園時は、園によってシステムに起因する違いにより、主に外遊びへの誘導を行う園もあるが、保育者はスムーズな登園を充実した園生活の要件とし、園方針やシステムによる時間的条件の中で、登園時の配慮を行っている。 A園では、場の変化による不安定な時間である一方で、集中に適した時間であるという朝の捉え方を背景に、室内遊びによるスムーズな一日のスタートを重視する。場の変化による不安定さは、担任による子どもの把握をベースとした子ども理解に基づく環境構成、視覚誘因による環境構成など、環境構成の配慮によって緩和を目指す。また遊びこむ状態への移行のために、目的意識による切り替えができるよう、遊びに対する継続的な目的意識の保持につながる配慮を行い、遊びへの期待感による登園への意欲を喚起する。徒歩通園による園児の集まりやすさがこれらの実践を支える。また身支度などのルーチン行程の簡素化も有効である。
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> 保育者は、充実した園生活のために、スムーズな登園ができるよう、さまざまな配慮を行っている。 保育者は朝の時間を「場の変化による不安定な時間」であるとともに「集中に適した時間」だととらえている。 「遊びたい」という継続的な目的意識の保持により、登園の意欲を引き出す。 朝の不安定さ緩和のために、個々の子どもを把握し、それぞれに適した環境構成を行う。 集中に適した時間だという朝の特性を生かすため、子どもが登園時の不安定な状態から、目的意識を持って気持ちを切り替え、遊びに入り込めるような配慮を重視する。

(2) A園の「登園時における保育者の配慮」の構造

以上の分析から、A園における保育者の登園時の配慮の背景となる価値観、ねらい、諸条件、配慮を構成する要素を抽出することができた。その全体の構造は以下のように述べられる。

A園で保育の大きなねらいとなっているのが充実した園生活を送ることである。そのために、保育の中で、その時々に応じた配慮や援助がおこなわれている。そのうちの 하나가、登園時にお

ける配慮である。登園時の配慮を重視する理由として、「朝は集中に適した時間である」という園の価値観があり、集中に適した時間である朝に自分のやりたい室内遊びを選択して遊びこむことによって、充実感や自信につなげて行こうとする園の方針がある。しかし一方で登園時は、家と園という異なる構造を持つ社会集団間の移行の時間でもあり、場の変化による不安定さを伴う。保育者は、遊びこむ状態への移行のため目的意識による切り替えができるよう、視覚誘因による環境構成を行う。またこの不安定さは園での遊びへの目的意識や期待感を持たない時に強く表れやすい。そのため、保育者は遊びへの継続的な目的意識の保持につながるような言葉がけや環境構成などを行う。このような朝の不安定さを減じ、かつ集中力を生かすための配慮の数々は、基本的に常にクラス単位で活動することにより、担任が常時子どもの状態を把握し子ども理解に努めることができる園のシステムにより保障されている。また個々の子どもへの細やかな配慮を要するこのような日課は、A園が徒歩通園で、子どもたちが9時に全員集まることによって実行しやすくなっている。

次に、上記の全体構造を構成する要素について詳述する。

①「場の変化による不安定な時間」「集中に適した時間」という朝の捉え方

「1. はじめに」でも述べたように、登園時の子どもは不安定さを抱えていることがある。家から園へと自分のいる場が変化し、その変化に対応するのに時間がかかる子どももいれば、さらに強い不安から登園を嫌がる子どももいる。

しかし同時に、朝は集中に適した時間だという考え方もある。例えば、兵庫県西宮市にある聖和大学附属幼稚園は1891年の開園当初はフレーベル主義の保育でスタートしたが、アメリカの進歩主義（日常の経験と興味に基づく経験主義的教育）の影響を受けた理論と実践を現在も継承し、午前9時から午前10時までの時間帯は子どもの脳が覚醒されてくる時間ととらえ、知的発達を促すための「自由作業」（1970頃より「自由活动」と改称）を現在もプログラムに組み込んでいる（島田他、2005）。

A園でも聖和幼稚園と同様に、知的発達を促すための自由活动を行い一日の日課の中でも重視している。具体的には工作、描画、手芸、木工、粘土など作る遊びを中心として、作る遊びに入り込めない子どものためにままごとやブロックなども取り入れている。

グループ・インタビューにおいては、この二つの捉え方はどの園の保育者にも共通していた。しかし、登園の形態によっては担任が不在の時間ができてしまうことなどから、「不安定な時間」としての朝に対する配慮の方が優先される傾向が見て取れた。一方でA園では「集中に適した時間」という点を重視するため、矛盾した朝の特徴を調和的に解消するために、②、③で述べるような配慮が保育者に求められている。

②担任による子ども理解、子ども理解に基づく環境構成、視覚誘因による環境構成

幼稚園指導要領（文部科学省、2008）に「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」とあるように、環境構成をはじめとした保育者の配慮には、日ごろの子ども理解が不可欠である。日ごろの子どもの様子から、今興味関心を持っていること、育ちつつあるところ、つまづいているところなどを見極めそこから予想した姿をもとに、環境構成をする必要がある。登園時、自分なりにやりたい遊びを心に決めてくる子どももいれば、そうではない子どももいる。そのことを踏まえ、入室から身支度までの動線にその子どもが興味を持ちそうなものを設定しておくなど、環境構成によって遊びこむ状態への移行がスムーズになる。予測に基づいた環境構成をしておいても子どもの遊びが予想していたものと違うこともありうるため、子どもの様子を見ながら適宜再構成を行う。

こうした子ども理解→予想→計画→環境構成→再構成の一連の流れが有効に機能するためには保育者が子どもをよく見ることが大切である。子どもと場所・時間を共有して活動する中で、子どもの取り組む様子をよく見て、子ども理解とよりの確かな予想を行うことができる。

例えばA園では、主にクラス単位で行動し、園庭、遊戯室など保育室以外で活動する際も、担任とともに移動する。これにより、保育者は一日の園生活の流れの中で子どもの様子を見るのが容易になり、次の保育を計画する際にも、担任もその場に立ち会っていることを前提とした計画を立てることができ、子どもの活動の実態に合わせた環境の再構成もしやすい。

③継続した目的意識の保持、遊びへの期待感

登園時の不安定さを減ずるための手立てとしては、不安定さを持って登園して来た子どもに対して興味関心を持てるような環境構成を行っておくことにより、気持ちを切り替えてスムーズに遊びこむ状態へ移行できるようにするという方向性の配慮も行うが、それ以前に、不安定さのない状態で登園できるよう、前日から遊びへの期待感を高めておくという手立ても重視される。翌日の目的意識につながるような配慮を行うことで、子どもは登園してすぐに遊びこむ状態へと移行しやすくなる。そのためにも、作りかけた作品を帰り際にクラスの全員の前で紹介したり、また初めて導入する遊びの場合も前日に遊び方や作り方を見せたりすることにより、子どもの目的意識がその日ごとの単発的なものではなく、継続的なものとなる。

これらは、実際に保育を行っていた時には意識化されていなかったが、オートエスノグラフィーとグループ・インタビューによる振り返りと言語化により顕在化され、SCATの手法により理論化されたものだと言えよう。

4. ま と め

幼稚園教育要領（文部科学省、2008）において、子どもの生活における発達のために必要なこ

ととして、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」と述べられているように、子どもが園生活において十分に自己を發揮し周りの人やものをはじめとする様々な環境に自発的にかかわって発達するためには、子どもが精神的に安定していること、主体的な活動が喚起されるような環境であることが要諦である。不安定になりがちな登園時にできるだけスムーズに情緒的な安定を取り戻し、自分で選んだ遊びを遊びこむことは、その日一日の園生活を充実したものにす第一歩となる。

本研究では、そのために必要な保育者の配慮をグループ・インタビューより明らかにすることを目指した。その結果A園の実践についての振り返りから、①保育者は「場の変化による不安定な時間」「集中に適した時間」という朝の捉え方をしていること、②子ども理解に基づく環境構成が大切であり、それらは常に担任が子どもの様子を把握しやすい園のシステムによって裏打ちされていること、③登園時の不安定さを緩和するために、継続した目的意識の保持による遊びへの期待を持てるような配慮を行うことの3点が浮かび上がった。

このように、登園時の配慮を工夫することで登園し身支度を終えてすぐに集中力を要する室内遊びを展開する実践もある一方で、岡野（2009）は「クラスの多くの子どもたちが活動に対して主体的に取り組んで楽しむようになる時刻は午前10時ごろであった。（中略）内的時間が充実してくるためには多少の外的時間の経過を必要とすることが示唆される。その意味において、多くの幼稚園・保育園が、課題活動を設定する場合にはこのころ（午前10時ごろ）から始めることは理にかなっているといえるだろう」と、登園後すぐに遊びこむことの難しい様子を観察結果から述べている。A園の実践から浮かび上がった、朝の集中した活動を可能にする配慮の要素がどのような園においても一般化が可能なのか、今後の検討を要する課題といえよう。

さらに、本研究ではオートエスノグラフィーによるグループ・インタビューでの言語データを主な分析対象としたため、遊びこむ状態が実際どのようなものなのか、保育者は保育を行う際、遊びこむ状態としてどのような子どもの姿を想定し環境構成を行っていたのかという、今回グループ・インタビューに現れなかった要素にあいまいさが残る。これも今後の課題としたい。

<引用文献>

- 藤崎 春代（1991）子どもにとって園生活とは何か？：大学生の自分史の分析より。帝京大学文学部心理学紀要1。35-60
- 平本 秀範（2000）登園しにくい子供と教師の保育態度—子供と保護者と教師の願いについての考察 その1—。日本教育心理学会総会発表論文集42。212
- 保坂 亨・中澤 潤・大野木裕明（編）（2000）心理学マニュアル面接法。北大路書房 136-137
- 加藤奈保美（2000）子どもの行動改善と母親の子どもの見方の変容過程—不登校を主訴とする幼

- 児への動作法適用から一, 日本保育学会研究発表論文集 (53), 148-149
- 児玉 理紗 (2011) 保育者の"語れないもの"の生成過程—保育カンファレンスの記録から—, 人間文化創成科学論叢14, 227-235
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領 教育出版
- 日本保育学会 (編) (1979) 日本の幼児保育: Early childhood education and care in Japan, チャイルド本社
- 岡田たつみ (2005) 「私の中のその子」とのかかわり方, 保育学研究43 (2), 73-79
- 岡野 雅子 (2009) 幼稚園・保育所における「遊びの流れ」と「日課的時間割」の関係について (第2報) 幼児の行動観察に基づく1987年と2007年の比較, 日本家政学会誌60, 101-110
- 大谷 尚 (2007) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54 (2), 27-44
- 大谷 尚 (2011) SCAT: Step for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析法—, 感性工学10 (3), 155-160
- 佐藤 智恵 (2011) 自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析—「語られなかった」保育を枠組みとして, 保育学研究49, 40-50
- 島田ミチコ・前橋 明・三宅 孝昭・石井 浩子・細川 七重 (2005) 聖和幼稚園における園児の生活状況と保育プログラムの妥当性について, 乳幼児教育学研究14, 145-155
- 牛田 匡 (2004) 自由教育学校研究に関する一考察—オートエスノグラフィー研究に注目して—, 関西学院大学 教育学科研究年報30, 61-68
- 山田 恵美・服部 岑生 (2005) 登園後の自由遊び時間における子どもの行動分析, 日本建築学会学術講演梗概集, 461-462

付 記

本研究は、名古屋市立大学大学院准教授上田敏丈を中心としたオートエスノグラフィー研究会での話し合いをもとに分析された。本論文を執筆したのは、名古屋市立大学大学院 博士前期課程 山本聡子及び松葉百香であり、主は山本聡子である。

謝 辞

この場を借りて、オートエスノグラフィー研究会のメンバーである二橋香代子さんにお礼申し上げます。